として天を拍つの黄河等、之を大陸の壯觀と謂はゞ云へ、穴居の土民に接するに至りては、宛然太古の世に在るの想あらしむ。

彼等が圓滿絶對と稱する唐虞無爲の時代は姑く措き。版圖廣大、文物隆昌なる李唐の盛時に方り、劉廷之が白頭を悲む翁に代るの一篇は、當時の狀況を窺ふに足るもの有ると共に、又現時の狀況を諷せしに似たり。

噫前に古人なく、後に來者なきものと做せし支那は、年々歳々花相似たるを知りて歳々年々人同じからざる理を知らず。之を今日より觀るときは、畢竟明日あることを知らざる自負心强き人類が愉快なる一場の春夢を貪りし結果斯る狀態に陷りしを知らば豈寒心に堪ゆべけんや。

文教共に地に墜ち盡して、周公の廟畔雜草高く、蟲聲切々白日に鳴く、豈惟黄昏に鳥雀の悲むを聞くのみならんや。